

# 鯨 研 通 信

第 338 号

1981年 4月

財団法人 日本鯨類協会 鯨類研究所 〒135 東京都江東区越中島1丁目3番1号 電話 東京 (642) 2888 (代表)



## 第二鯨学事初め

— 想い出すまま (2) —

大 村 秀 雄

ロンドンへ

われわれの乗った第二日新丸は4月1日フリーマントルを出て、ヨーロッパへと向った。行く先はロッテルダムかハンブルグが、この時はまだ何れとも決定していなかった。コースは印度洋を西に向かって進み、ケープタウンで燃料を補給し、それよりアフリカ西岸を北上するのであるが、航程は約45日である。スエズ運河は通れなかった。今日から見れば、ずい分のんびりした話であるが、飛行機のまだ普及していない時代であったから、これも致し方ないことであった。

当時大洋漁業には2名のノルウェイ人砲手がいた。ハンセンとクリスチャンセンである。この両名も、第二日新丸に乗って、故国に帰ることとなった。

このような航海では何もすることはない。デッキに出て走ってみたり、有井さんとキャチボールしたりするのが関の山であった。しかもボールそのものもなかったから、古手袋を紐でぐるぐる巻いて手製のボールを作った。碁とか将棋とか室内遊戯の出来ない私は、こんなことでもするより外に致し方なかった。碁は、折角のいい機会であるからと考えて、毎日有井さんに手ほどきして貰ったが、結局はものにならなかった。

幸いフリーマントル入港中本を数冊買って来たから、それを読んだが、特に面白いものもなかった。このような時である。さき書いた Goldon Hayes の Antarctica を、桜井船長が貸してくれたのである。この本によって、退屈な航海も、毎日楽しいものとなったのである。

第二日新丸は4月21日の夕刻にケープタウンに着いた。目的は燃料と水の補給であるから、明朝にはもう出帆することになっていた。有井さんと2人で6時頃から上陸して街を見物した。夜の公園ともう閉店して

しまった商店街を歩いて、ビールを飲んで船に帰った。

翌4月22日早朝に船はケープタウンを出港し、一路ロッテルダムに向うこととなった。この時点では、もう行先もはっきりしたし、又横山さんからの連絡により、来る6月13日から国際捕鯨会議がロンドンで開かれ、日本はオブザーバーとして出席することになるかも知れない、ということであった。

ケープタウンからロッテルダムの間の航海については何も書く必要はない。6,170 哩の航程を24日かかって、5月16日にロッテルダムに着いた。同日の未明にマース河の河口に着いたが、潮の関係で正午頃になってやっと河を溯って、ロッテルダムに着いた。正確にはロッテルダムではなく、Vlaardingen の Nieuwematemex のワーフに横付けし、鯨油の陸揚げを開始したのである。

その前日の5月15日の夜農林省から一通の電報を受け取った。ところが全然意味がとれない。当時農林省と捕鯨母船乗船中の監督官との間の連結は、暗号を使っていた。これはクロスワード・パズルと同様の用紙があつて、これに横から文章を入れていく。それをタテに書いて打電する。受け取った方は、先づタテ書にして、それを横から読めばよいのである。この様式に甲と乙の2通りあつたが、当方は乙の様式しか持っていなかったのに、甲の様式で打って来たから、全然意味がとれなかったわけである。

16日に船が岸壁に着くと、早速私は上陸してロッテルダムに行き、郵便局から電文不明再電乞うと打電した。船が航海中は無線で直接日本と連絡できるが、領海内に入ってから陸上局に頼らなければならない。折返し電報があつて、ロンドン行が決定したという通知であった。そこでヘーグの日本大使館に行つて、パスポートの手続をして、5月23日夜船でロッテルダム

を発って、24日早朝グレーブセンドに着き、直ちに汽車でロンドンに向った。ロンドンにはビクトリア・ステーションに着いたが、そこには三菱の大平さんが迎えに来てくれていた。

## ロンドンにて

ロンドンの中心街を、マーブル・アーチから東に向かって走る大通りがある。これがオックスフォード・ストリートである。これに対して、トラファルガー・スクエアの東側から北に向う大通りがある。これがチャーリング・クロス・ロードであるが、これがオックスフォード・ストリートと交叉する点が、トッテナム・コート・ロードである。この交叉点のすぐ手前を右に入る小さな通りがある。これがデンマーク・ストリートであって、ここに大和ホテルという、日本人経営の、日本人用のホテルがあった。大平さんは私をこのホテルに案内してくれた。

今日では日本人経営のホテルは超デラックスのものが多いが、当時あっては小さくて、いくらか汚くて、高級なものではなかったが、それでもアットホーム的な、気楽で安堵感があった。農林書記官の山口立さん御夫妻も泊っておられた。白山丸でマルセーユに着き、そこから汽車で来られたという。その白山丸は、第二日新丸がロッテルダムに入港する3日前に、われわれを追い越して行った船である。当時ロンドンには農林省のお米の事務所があった。山口さんはその所長として着任されたのであるが、前任者の伊藤佐さんも、事務引継のため、まだロンドン滞在中であった。私のロンドン滞在中は、ずいぶんこの御両氏の御厄介になった。

このようにして私は、1938年5月24日から7月3日にロンドンを去るまで、1カ月以上この大和ホテルに滞在していた。この間に6月14日から同24日まで国際捕鯨会議があり、これに出席を命ぜられたのであった。この年の会議に日本は、最初はオブザーバーを出席させる方針であった。それは日本の南氷洋捕鯨はまだ始まったばかりであり、ノルウェーや英国の、いわゆる先進国と同じ規制を受けるのは不利だと判断されたからである。その前年に開かれた1937年の国際捕鯨会議には出席しなかったが、これは国内的にもまだ体制が整っていなかったからでもあろう。

1938年の会議はいわば2回目の会議であり、前年度の会議で、現行の国際捕鯨条約の前身とも言うべき、国際捕鯨協定が出来上がっていたのであるが、その大幅な修正案も提案されていた。前年度の決定事項も、

日本にとっては困ることが多かったのである。ところがオブザーバーという考え方は、ヨーロッパの捕鯨国の容れるところとはならなかった。利害関係のない国が参考のために出席するというのがオブザーバーであり、日本のような捕鯨国はオブザーバーとはなり得ない。どうしても正式代表を出席させろ、そうしなければ、日本の鯨油に対しては不買同盟をするという強硬な態度を示した。ヨーロッパで鯨油を買ってくれなければ、日本の母船式捕鯨業は成り立たない。現実には不買同盟が出来るかどうかは別として、日本政府も結局は、この会議に正式代表を出席させることに踏み切った。

当時の駐英大使は吉田茂さんであった。誰を代表にするか、いろいろ問題があったが、結局当時三等書記官であった小滝彬さんが任命された。これは仕事のやりくりの都合もあったと思うが、吉田大使が小滝さんを高く買っていたことが、第一の理由であったものと思う。私は大日本帝国代表顧問を命ぜりという辞令を貰った。今日では随員ということであると思うが、とに角この時は顧問であった。戦後の国際捕鯨委員会になってからは、一時随員となったが、水産庁を辞めてからは又元の顧問となった。正式に辞令が出たのはこの2人だけであったが、この外に大使館の光藤さんも出席した。当時はまだ官補であった。

民間では石関自助さんがロンドンにおられた。石関さんは元三井物産の社員であったが、極洋捕鯨株式会社の創立に際して、極洋に移り、太田康治さんと同様、常務取締役となっていた。この外に日本水産の大西廉作さんと吉田隆さんがロンドンにおられた。大西さんは第二日新丸の船団長、吉田さんは事務長として、南氷洋で操業し、大洋の船団と同様、オーストラリアのフリーマントルで、捕鯨関係者を日南丸に移し、日南丸の鯨油も積んで、第二日新丸の後をロッテルダムに向い、第二日新丸が鯨油陸揚げ完了後、その同じ岸壁に接岸して、御両人はそこで下船し、バリー経由でロンドンに到着したのであった。

捕鯨会議のことは後で別に述べることにするが、この1カ月余りのロンドン滞在は、私のその後の仕事に大きくプラスになったことと思う。それは会議を通して、世界の鯨学者と知り合ったことである。又この人たちの好意で多くの文献を入手することが出来、これが第二鯨学の発展に大いに役立ったからである。

この時のアメリカ代表は、ワシントンの自然史博物館のケロッグ博士であった。同博士は鯨の化石の研究者として著名であったが、鯨の保護にも熱心であり、

戦後は IWC のアメリカ代表を長く勤め、かつ IWC の二代目の議長であった。ノルウェーはオスロー大学のベルガーセン教授であったが、彼は後に駐スウェーデン大使となったり、文部大臣になったりした。この人が IWC の初代議長である。この御兩人には随分御厄介になった。特に日本が敗戦後最初に参加した、1951年の IWC の第 3 回会議の際は、格別の御力添えを戴いた。

鯨の研究面では、何と言っても、マッキントッシュ博士である。同博士は、当時もう既に鯨の大家であって、この会議でも科学委員会の議長を勤めていた。当時日本の大使公邸はグローブナー・スクェアの 1 番地にあった。会議中のある日、吉田大使が英国代表をここに招待した。英国からは、この時の会議の議長モリス氏とマッキントッシュ博士、それに戦後初代の事務局長となったドブソン氏が出席した。この席で私はマッキントッシュ博士にディスカバリー・レポートの鯨に関するものを一と揃い揃えないかと申し入れた。同博士も快諾してくれた。当時既に鯨の主な種類については、報告が出されていた。1929年に出たマッキントッシュとウィーラーの、南半球産シロナガスクジラとナガスクジラを最初として、マシウスがザトウクジラ、イワシクジラ、マッコウを纏めていた。これらは鯨の研究特に第二鯨学をやる人間にとっては、必読の書であるが、まだ日本にはなかった。マッキントッシュ博士は、この時の約束通り、これらの報告書を農林省宛に送ってくれた。

戦争中私はこれらのディスカバリー・レポートを自宅に持ち帰っていた。都心部は危いと考えたからである。当時大手町にあった農林省は奇麗に焼けてしまったが、これらのレポートは残った。鯨研で育った人達は、このレポートに厄介になった筈である。鯨研にはディスカバリー・レポートは一と揃い揃ったが、これとは別に、必要なものがもう一冊宛あったのである。多くの人が熱心に読んだとみえて、赤線がやたらに引張ってあったり、手垢ににじんでいたりにしている。この思い出の多いレポートは、今日では遠洋水産研究所にある筈である。

当時ロンドンの多くの本屋でショウ・ウィンドーの真ん中に飾ってある 1 冊の本があった。そのカバーは、1 隻の船が氷に閉じ込められて、立ち往生している写真であった。ディスカバリー II 号である。F. D. オマネイの South Latitude である。早速買って読んでみた。面白い本である。海洋文学書であって、コンラッドにも匹敵すると書いてある。著者オマネイ氏は

ディスカバリーの研究者であって、本の内容は、ディスカバリーの研究者が、サウス・ジョージヤで又は南アフリカで鯨の調査を行なっている有様や、調査船ディスカバリー II 号で海洋観測を行なっている有様が、生き生きと描かれている。

戦後のことであるが、私は第 1 回の南氷洋出漁の際船の中でこれを日本文に直した。実は戦前にも 1 回やったのであるが、気に入らないので、やり直したのであった。日本に帰ってから読み直してみたら、やはり気に入らない。そこで毎晩おそくまでかかって、もう一度書き直した。同じものを都合 3 回書いたのである。鯨研通信第 31 号から第 49 号まで 16 回に亘って連載した、オマネイ氏南氷洋がこれである。

ロンドン滞在中私がしばしば訪問したのは大英博物館である。大英博物館は人文科学と自然科学と二つに分かれており、前者はホテルのすぐ近くに、後者はクロムウェル・ロードにあった。共に夥だしい標本であるが、後者には特に鯨の室があり、ここにシロナガスクジラの実物大の標本や骨格がたくさんあった。ガイド・ブックもあるし、報告書もあった。これらを読んでみて、英国では海岸に鯨が漂着した場合、住民がそれを勝手に処分出来ないことを知った。先づ大英博物館に知らせなければならない。大英博物館ではこれを調べて報告を出している。この仕事をやっていたのが、有名なフレーザー博士であった。ただしこの時は私は彼と会う機会はなかった。まだそんな知識もなかったのである。

ロンドン滞在中は、毎日のように出歩いた。ガイドブックを買って来て、地図を見ながら、大抵の処は歩いて行った。掃りは地下鉄やバスに乗った。仕事の上で関係があったのは大使館であるが、当時大使館はポートマン・スクェアにあった。オックスフォード・ストリートの裏通りである。セルフリッジという百貨店よりマーブル・アーチに近い方である。その先がマウント・ローヤル・ホテルである。

大使の公邸については既に述べた通り、グローブナー・スクェア 1 番地であるが、この建物は戦後も暫くの間はそのままとなっていたが、今日ではホテルとなっている。ヨーロッパ・ホテルの入口に入って、左側の隅が公邸のあった所である。

農林省の事務所は商業の中心街シティーにあった。ここには杉浦さんという人がいた。彼は日本から留学生として渡英したが、すっかり英国に住みついて、奥さんも英国人であった。現地採用という形で雇われていたが、この人にも随分御厄介になった。南極関係の

図書も、この人に頼んで集めて貰ったのであった。

日本の商社もこのシテにあり、特に三菱の大平さんには、その後も大変御厄介になった。彼は普通の商社マンと異なって、上海にあった東亜同文書院の出身で、中国語が得意であった。戦後は伊藤忠に勤めていたが、私は彼に中国語の手紙を書いて貰ったことがある。それは鯨研の英文報告と交換で、向うの報告を買ったという申込の手紙であった。文化大革命以前のことであったが実現した。その後一時中絶したが、又今日では復活している。

大和ホテルの直ぐ前に、これも日本人経営の、日本人向の商店があった。品物は何でもある。英国で必要な日用品から、日本へのお土産など、ないものはないと言った方がよい。さらにここで洋服も作ってくれる。それはどこかに特約店があって、注文すると、日を決めて寸法をとりに来て、さらに日を決めて仮縫いに来てくれる。私はここで背広2着とモーニングを作った。何しろ南氷洋からの着たきり雀であるから 最低それだけは必要であった。

今日では飛行機で旅行し、かつ荷物の重量も制限されているから、旅先で礼服はやかましくない。だが戦前はそうではなかった。礼服はどうしても3種類が必要だった。特に国際会議に出席する場合はそうであった。

先づ第一がモーニングである。これは昼食に招待された場合に着なければならぬ。夜の場合は燕尾服(テイルコート)かタキシード(ディナー・ジャケット)である。テイルコートかディナー・ジャケットかは、その宴会の格式による。さらに靴はピカピカに光ったエナメル靴であり、ワイシャツやカラーも糊のきいたスルメである。胸のボタンやカフスボタンも宝石の入った高級品である。ネクタイも白と黒を揃えなければならぬ。

これを全部新調したら莫大な金となる。先づワイシャツだとか靴は買うこととした。問題は礼服であるが、モーニングなら日本に帰ってからでも使えるが、テイルコートは先づ着ることはない。そこでモーニングだけを作ることとし、他は借りることとした。幸い石関さんがタキシードを新調し、古いのが余ったというので、これを借りることとした。テイルコートは大使館の人から借りることとした。さらにシルクハットが必要であったが、これも大使館の人から借りた。

会議は6月14日の火曜日から始まった。ただし最初に昼食会があった。ストランドのサボイ・ホテルで英国の農漁食糧大臣のモリソン氏招待の昼食会であった。早速新調のモーニングを着、借りたシルクハット

を手に持って出かけた。シルクハットは何も冠らなくてもよいのだそうである。小籠さんは勿論のこと、吉田大使も招待されていた。私の左隣はアメリカのケロッグ博士、<sup>1</sup>右隣は英国のドブソン氏、前はドイツ代表のウォルター氏であった。ドブソン氏は戦後IWCの事務局長を長く勤めたが、この時は英国代表の一人であった。

英国でモーニングを着たのは、これが最初で最後であったが、さすがは戦前の英国製品である。40年以上経過した今日にあっても容色は衰えない。昨秋頼まれてKさんの御仲人役をやったが、その際着用したのが、この時のモーニングであった。

テイルコートは、さき書いた、吉田大使が大使公邸に英国代表団を招待した時に着用した。この時はまだ雪子夫人も健在であった。私にとって最大の収穫は、既に述べた通り、マッキントッシュ博士から、ディスクバリー・レポートを貰う約束を取りつけたことである。

タキシードはロンドンでも着たが、帰りの船の中でも、よく着た。会議が終ってから、私はノルウェーとドイツに行き、ドイツの客船オイローバでアメリカに渡り、汽車で大陸を横断し、サンフランシスコから日本の秩父丸で、横浜に帰って来たが、その船の中では、夕食時にはタキシードを着る。ただし乗船した日と港に入る前日は着なくてもよかった。

6月14日の昼サボイ・ホテルで昼食会があり、終ってから午後3時30分から国際捕鯨会議が始まった。会場はこれもストランドにある、シェル・メックス・ハウスであった。ただしこの日は、英国の代表モリス氏を議長に選任し、明日の日程をきめただけで散会した。会議の内容については、章を改めて、その大要を述べることにする。

なお私のロンドン滞在中に、お目にかかった農林省の方に、西村健次郎さんがあった。西村さんはそれまでニューヨークの生糸の事務所に勤めておられたが、農林省に帰任されることとなり、その途中ロンドンに寄られたのである。終戦当時西村さんは水産課長をしておられた。私もこの時は魚の末端配給だとか、価格の仕事をしていたので水産課に属していた。終戦の年の暮も近づいた時、魚の冬枯れの時期を乗り切る一つの方法として、小笠原の捕鯨をGHQに頼んだのも西村さんであり、それが南氷洋の捕鯨へと発展したのであった。

終戦の翌年の5月のある日のことであった。GHQのアダムスさんから、西村さんと私と揃って、やって

来いという連絡があった。その時話されたのが、いよいよ正式に南氷洋捕鯨の申請書を出せということであった。当時GHQは三菱のビルにあった。丸ビルの隣である。丸ビルには大洋漁業がある。西村さんと私は、その足で大洋漁業を尋ねて、この話をして、他社への連絡を頼んだ。もう故人となってしまった鈴木三弥さんの話によると、私たちが室に入ってくるなり、それを直感したという。その時の喜びが2人の顔に出ているのであろう。

## 国際捕鯨会議

以上のような経緯で、小滝さんと私は、日本の正式代表として、国際捕鯨会議に出席することとなったが、今までの会議で、これほど準備不足で出席した会議はなかった。ロンドンの大使館に日本から公電が届いたのは、5月31日であり、この時はオブザーバーとして出席すること、昨年の協定には参加出来ないこと、その理由などが書かれていた。この公電をもとにして関係者の間で、いろいろ協議したが、これと言った名案もなかった。なおドイツからの情報によると、本会議に先立って、主要捕鯨国がオスローに集まって、準備会議を行ない、その際協定不参加国の鯨油は買わないようにするという提案も出た由であり、大変な会議になりそうだと予感した。会議の準備が忙しくなったのは6月3日頃からであった。アジェンダも手に入ったし、昨年の協定文は、オックスフォード・ストリートにあった、政府の刊行物を売っている店で買って来た。会議に先立って、小滝さんに連れられて、英国代表に会って、事情を聞いたり、日本の事情を説明したりした。当時英国の農漁食糧省は、国会議事堂の近くにあり、通りを距ててテムズ河に面していた。日本が正式に代表を出席させるという電報は、会議の前日の13日に届いた。その翌日の14日は、午前中にドイツ代表ウォルターに会って、意見の交換を行なった。ドイツは日本と同様、南氷洋捕鯨の、いわば新参者であったからである。

会議の参加国は南アフリカ、アメリカ、アルゼンチン、オーストラリア、カナダ、デンマーク、アイルランド、フランス、ドイツ、英国、日本、ニューハウンドランド、ニュージーランド、ノルウェー、ポルトガルの15国であった。代表は何れも年配の人たちばかりであり、30歳そこそこの、いわば若僧が出たのは日本だけであった。オーストラリアの代表は、後年総理大臣になったR.G.メンジース氏であった。ノルウェーのB.ベルガーセン教授は、後年文部大臣になってい

る。ベルガーセン教授の後を継いだのが、J.T.ルード教授であるが、この時はまだ彼の出番ではなかった。

1937年の国際捕鯨協定の期限は1938年6月30日までであったから、これを延長すること及び未加入国を加入させることがこの年の会議の大きな目的であったが、さらに、ザトウクジラの捕獲禁止、禁止区域の設置、漁期の制限等大きな問題が提案されていた。

1937年協定をまだ批准していない国は、南アフリカ、アルゼンチン、オーストラリア、デンマーク、フランス及び日本の6国で、6月17日に、それぞれその事情を説明した。このうちデンマークはフェロー島で捕鯨を行なっている。肉は食用にしているが、獲れる鯨の体長が小さいから、制限体長を除外してくれば加入すると声明した。それ以外の国は、特にどうという困難性はなかった。

最後に日本が立って説明したが、それは北太平洋、日本近海、印度洋を除外し、かつ南氷洋の漁期を11月1日から3月15日とするよう要求した。この日本の声明は本国政府の指示通り行ったのであるが、各国の猛反撃を受けた。会議の様子は逐一本国に打電したが、日本の意向も強く、最初は、漁期を11月20日から3月15日迄にしてもよいという程度のものであった。

日本で困る問題は、漁期と制限体長であった。漁期は1937年協定では12月8日から4月7日までであったが、日本船団はもっと早く操業を開始していた。私の乗った第二日新丸は、既に述べた事情により、大分おくれて11月24日に操業を開始したが、日新丸は11月1日から操業を開始している。

制限体長は南氷洋のシロナガスクジラもあったが、それより問題は日本沿岸のものである。これに関してはデンマークも同じ事情にある。そこで食用に供する鯨が問題となり、結局、根拠地で人間の食用として捕獲する場合は、シロナガス、ナガス及びイワシクジラは5フィート宛制限体長を緩和することとなった。これらの鯨について、この当時はまだ、鯨の体長そのものが、北半球のものは南半球のものより小さいという事実が知られていなかった。世界中どこも同じだと考えられていた。

南半球と北半球の鯨について、このような体長の差があることが判明したのは戦後のことである。戦後捕鯨はいち早く再開されたが、捕鯨条約を守って操業することが条件となっていた。母船には監督官が乗船するのは当然であるが、沿岸の基地にも監督官が常駐した。これらの監督官が、いわゆる第二鯨学の調査を担当してくれた。具体的には睾丸や、卵巣の重量を測定し

その他いわゆる生物学的な調査を実施してくれた。

日本が戦後最初の IWC の会議に出席したのは、1951年にケーブタウンで行なわれた第3回会議である。この時制限体長の問題が論議されたが、この時はもう既に、これらの資料が纏められて、南半球と北半球で体長に差があることが判明していた。日本がこれを持ち出したが、ケログ博士を始め、一同がこれを認めて、この会議で始めてこの規定が出来たのであった。なおこのような差のあることはノルウェーでも証明されていた。ルード教授等の鯨ヒゲによる年齢査定と関連して、判明したのである。

1938年の会議ではマッコウ鯨についても、この緩和規定が適用された。日本人は *strange stomach* を持っているとかさされながらも、強引に主張したのである。外国ではマッコウの肉など人間の食べるものに非ずというのが常識であった。ただこの規定は、1946年のワシントン会議の際に、日本欠席のまま削除されてしまった。今日そんなことを主張すれば、水銀の問題と関連して、散々に悪口を言われるであろう。

この年の会議は日本の提案をめぐる紛糾したが、日本も結局は大局的見地から妥協して、会議は実質的には6月23日に終わった。日本は2年以内に協定加入が出来るよう国内の手続を進めることを声明した。これは条約加入であるから、国会の承認が必要であり、その期間を考えたのであるが、戦争のため、戦前は遂に加入の機会がなかった。

翌1939年には、やはりロンドンで捕鯨5カ国の非公式会議があり、日本からは小笠さん、それに農林省から横山さんと松浦さんが出席した。

## オ ス ロ ー へ

会議が終わってから、いよいよ帰国することとなったが、せつかくの機会であるから、ノルウェーとドイツに寄り、それからアメリカを回って帰ることとした。ヨーロッパでは当時既に旅客用の飛行機が飛んでいたから、ロンドン——オスローとオスロー——ベルリンは飛行機に乗ることとし、大西洋はドイツの客船オイローバ、太平洋は秩父丸で渡ることとした。

ロンドンを発ったのは7月3日の早朝であった。先づホテルを出てビクトリア・ステーションに行った。ここでいわゆるチェック・インをする。荷物ばかりでなく、人間の体重も測った。ここからバスでクロイドン飛行場に向ったが、乗客は私1人であった。クロイドン飛行場には飛行機は並んでいたが、建物は何もない。1台の飛行機のすぐ横に止まって、さあ乗れとい

う。見るとドイツのエンケルであった。ただしこの飛行機は、翼も胴体も、トタン状の波打った金属で出来ていて、平板なものではなかった。操縦士、機関士、それに無線技師の3人が乗っていた。乗客は私1人であった。

今日のようにコンクリートで固めた滑走路はなかった。草原の上をつつ走る。兎が飛び出して、しばらくは一緒に走る。席の横にゴム製のパイプがブラ下がっていて、その先にラムネの玉が入っている。手にとって、先を上に向けて、2、3回上下に振ると、玉が下に降りて、パイプの口から空気が噴き出してくる。気分が悪くなると、このようにして新鮮な空気を顔に当てる。

最初に着いたのがハンブルグであった。ここには平屋であったが、空港ビルがあり、一室に案内された。ここには大勢のお客さんがいたが、奇妙に感じたのは、私が室に入ると、後から鍵をガチャンと閉めてしまったことである。つまりこの室から一步も外には出られなかった。

約1時間余り経つと又飛行機に乗せられた。同じ飛行機であるが、今度は満席である。飛行機は途中さらにコペンハーゲンとゴータボルグに寄って、オスローには夕方になって着いた。ロンドンを発ったのが午前8時45分で、オスローに着いたのは午後5時であった。

オスローの飛行場は今日の飛行場とは違っていたように思う。この時の飛行場は山の中で、滑走路はいくらか斜になっていて、降りる時は山側に向って、出発する時は谷側に向って滑走したように思う。

飛行場からオスロー市まではバスが運んでくれた。バスが市内のターミナルに着くと、1台の車が近づいて来て、ミスター・オオムラかという。全然予期していなかったので驚いたが、それに間違いはないから、そうだと答える。たった今石関さんから電報を受け取って、迎えに来たのだという。ダールさんであった。東京に昨年の9月までいた由で、日本語も上手だった。ブリストル・ホテルに案内してくれた。奥さんにも来て貰って、ホテルで食事をしながら、日程等の打合せをした。

翌日はベルガーセン教授に会いたいと思って、ダールさんに何回も電話をかけて貰ったが、留守で遂に会えなかった。第二日新九船団で砲手をやっていたハンセンには連絡がとれて、明日トンスバルグに行く約束をする。余った時間は本屋に行って本を注文した。この本は *Hvalrædets Skrifter* である。

ノルウェーは1929年に法律を制定して、捕鯨業の規

制を初めて行なったが、同時に生産した鯨油 1 バレルにつき一定の額(最初は 0.2 クローネ)を課税し、これを、国際捕鯨統計局、鯨研究所、監督官の費用等に充当することを定めた。鯨研究所はオスロー大学の海洋研究所を兼ねている。したがってこの所長が科学者を代表して、鯨会議にも出席している。有名な水産学者の J. Hjort 教授、B. Bergersen 教授、J. T. Ruud 教授を経て、現在は A. Jonsgard である。

彼等は南氷洋捕鯨の解析を行なっている。採り上げた最初の漁期は1929—30年漁期であり、これはノルウェー船団だけのものではあったが、1933—34年漁期から英国船団のものも含めるようになった。漁場を Area と Square に区分したのも彼等であり、CDW の概念を導入したのも彼等である。今日と異なっている点は Area I である。彼等の Area I は、いわゆる南シエットランド漁場で、南極半島の西側の極く狭い範囲であった。ただしこの区分をした当時は、この漁場では、もう操業はしていない。

南氷洋の禁止区域は1938年の会議の時設けられた。その理由の1は、どの船団も操業していないから、実害のないことであった。この区域は1955年に開放されたが、この時現在の Area VI と Area I を定めたのであった。

現在ともう一つ違う点は、漁場を緯度によって A、B、C 帯と区分したが、40—50° S 帯では現実に操業していなかったから、これを考慮しなかったことである。1937年の国際捕鯨協定では、母船式の操業区域を南緯40度以南と定めたが、現実には50度以北では操業していなかった。それがイワシ鯨を獲るようになって40—50度帯でも操業するようになった。そこで致し方なく、先づ A、B、C と南に下がって、今度は D、E、F と北に上る現行方式がとられるようになった。北太平洋の漁場が M だとか N だとかになっているのは、このためである。

この Hvalrådets Skrifter は、漁場の解析だけでなく、他のいろいろな論文も掲載されている。1938年までに15冊刊行されていた。私は一括してこれを購入した。この本は戦後大いに役立った。それは戦後第一回の操業の時、外国からいろいろ非難が出て、われわれは防戦しなければならなかったが、その時この中の資料を引用して釈明したのであった。この一連の報告は、現在鯨研の私の本棚の中に収まっている。鯨研には別に一と揃があるからである。もう表紙がとれたり、ボロボロになったりしているが、私にとっては貴重品である。

その翌日の7月5日に私は汽車でトンスバルグに向かった。鈍行だったので大分時間がかかって、トンスバルグに着いたのは1時近かった。あいにく土砂降りの雨であったが、汽車が着くとハンセンが飛びついて来た。朝から何時間も待っていたと言う。タクシーで彼の家に向かったが、郊外の広い敷地に、バンガロー風の奇麗な家が建っていた。私は彼の家に2晩泊めて貰って、附近を見物したり、他のノルウェー人砲手を訪問したりした。

サンデフィヨルドに行って鯨の博物館を見物したり、港に停泊しているノルウェーの母船を見物したりした。但し船の中は見せて貰えなかった。ここでは国際捕鯨統計局のポールセン氏に会うことが出来た。彼はロンドンの会議にも出席していた。ここでノルウェー捕鯨雑誌を発行しているから、その購読を申し入れて、1年分の代金を支払った。雑誌は毎月きちんと送ってくれたが、そのうち日本からの送金がむづかしくなると、私は1年か2年分滞納した。

戦後の1951年にGHQの許可が出て、私はケーブタウンで開催されたIWCの第3回会議に出席することとなり、アメリカ、ノルウェー、英国を經由して、ケーブタウンに向かった。戦後最初の会議であるから、主な関係者に会うためであった。アメリカではケロッグ、ストックホルムではベルガーセン(当時駐スウェーデン大使だった)に会い、オスローを経てサンデフィヨルドにも行った。それはポールセンが病気で入院中であることをベルガーセンから聞いたからである。病院には花束を届けて貰ったが、序に、国際捕鯨統計局の人に会って、雑誌代金の未納の話をして、この時やっと完済したのであった。

なおポールセンは遂に病から回復することは出来なかった。国際捕鯨統計局の事務局長は H. Paulsen から現在の E. Vangstein に、この年に代ったのであるが、彼等は義兄弟であり、奥さんが姉妹である。その父親が有名な S. Risting である。彼にはノルウェー捕鯨史という立派な本がある。お嬢さんが3人あり、長女がポウルセン夫人、次女の御主人も同じく捕鯨統計局員で、1951年に訪れた時、私はこの人に会ったのであるが、名前を憶い出せない。3女がバングスタイン夫人である。

このようにしてハンセンの家に2泊したのであったが、私の驚いたことが一つあった。それは便所である。家そのものは立派であるが、母屋に便所はないのである。裏に小さな小屋があり、これが便所であった。日本の御不浄という概念と全く同じである。入る

と入口は土間であるが、その先が板張りの腰掛けとなっていて、大人用と子供用の、大小二つの穴が開けてある。下は大きな肥溜である。横の壁には新聞紙を小さく切って、糸で吊してあった。日本の田舎そっくりであった。

なおトンスブルグ滞在中、私はハンセンに連れられて、メルソム氏に会った。メルソム氏は、東洋捕鯨の時代に、日本で砲手を長くやっていた人であるが、この時はまだ健在であった。

7月7日にオスローに戻り、再びブリストル・ホテルに泊り、翌日は市内見物などをして、9日に飛行機でベルリンに向った。

## ド イ ツ に て

オスロー飛行場を発ったのは午前8時15分であったが、途中ゲーテボルクとコペンハーゲンに寄ってハンブルグに着き、ここで飛行機を乗り換えた。それまではロンドン——オスローの時と同じ飛行機であったが、ハンブルグ——ベルリンは、10人乗りの小型機で、最新式のものであった。午後2時30分にベルリンのテンベルホーフ飛行場に着いた。宿はきめてなかったので、タクシーの運転手に良いホテルに連れて行くよう頼んだら、エデン・ホテルという高級ホテルへ連れて行かれた。

ベルリンでは、会議の時会ったドイツの代表ウォルター氏を尋ねて、ハンブルグへの手配を依頼した以外は、これからの旅行の手続などをした。ハンブルグではドイツの母船を見たいと思って、これをウォルターに頼んだのであった。

7月14日にベルリンを発って、汽車でハンブルグに向ったのであるが、その汽車の中で、私は重大なニュースを知った。私の前にドイツ人が腰かけて新聞を読んでいたが、読み終ると、それを私に差し出して、ある記事を指で差した。読んでみると、日本が次のオリンピックを返上した、そのニュースであった。その前年ベルリンでオリンピックがあり、その陸上競技場は、つい先日飛行機の上から見たばかりである。何か心の引き締まる思いをした。

ハンブルグではアトランティック・ホテルに泊ったが、その翌日は早速 N. Peters 博士を訪問したが休暇中で会えなかった。彼は駅の近くの博物館に勤めていた。ペーターズ博士の下で、やはり鯨の勉強をしていた K. Schübert 博士には会って、いろいろと話を聞いた。当時 Peters 博士は *Der neue deutsche Walfang*. 1938. という本を著しておられた。早速1冊を買いき

めたが、誠にいい本であり、当時の最新の知識を包含していた。昭和17年に私は、松浦義雄、宮崎一老の両氏と共著で、鯨、その科学と捕鯨の実際という本を書いたが、その時、いわば種本として使ったのが、このペーターズの本である。

シューベルト博士は戦後ハンブルグの水産研究所で、ニシンの研究などやっておられたが、鯨にも依然として興味を持ち、1955年に *Der Walfang der Gegenwart* という本を書いた。この本もいい本であるが、ドイツ語で書かれているためか、あまり読まれていないのは残念である。

ハンブルグでは捕鯨母船を見ることができた。ウォルターの手紙を貰って来たが、そのおかげで、Kapitän Kircheis が案内してくれた。ドイツの母船の中で最も旧式なものと最新式のものを見せてくれると言って、シュード・メーヤとウニタスを見せてくれた。前者はいわゆる改造母船である。ウニタスは戦後は南阿のアブラハム・ラルセンとなり、さらに大洋に移って、第二日新丸となった。

なおハンブルグでは鯨油業界の人たちが、私のために夕食会を開いてくれた。場所はフィーヤ、ヤーレス、ツァイテン、つまり日本語で言へば四季である。この時の主催者の1人で、私の隣に座って、何かと面倒を見てくれた人がいた。例えば食後のデザートにメロンが出て来たら、彼は私の皿をのぞき込んで、これはよくないと言ってボーイを呼んで取り替えさせた。私にはどちらがどっちともわからなかった。ドイツ人ではあるがアメリカ人的で、何かとあいそがよかった。

この人がエンゲル氏であった。今となつてはエンゲル氏と言っても、なかなかおわかりにならないと思う。中国から伊藤律氏が帰国して以来、ゾルゲ事件なるものが再び問題となったが、このエンゲル氏はゾルゲ事件の中心的人物でもあった。彼は戦争中日本に来ていた。当時日本は鯨油をドラム缶に詰めて、シベリヤ鉄道経由でドイツに送っていた。彼は鯨油の取引業者であるから、もち論そのために来日したのであろう。私は彼とハンブルグで会っただけで、日本に来てから会っていないから、詳しくは知らないが、彼がスパイであることが日本の警察に知れ、警官が彼のホテルに踏み込んだが、その逮捕の寸前に自殺してしまった。

7月19日私はハンブルグを発って、ブレーメンに行き、ブレーメルハーフェンから、ドイツの豪華船オイローバに乗って大西洋を横断することとなった。石岡さんとはベルリンで落ち合つて以来、日本に帰るまで一緒だった。



船は途中サザンプトンとシェルブールに寄って、7月25日にニューヨークに着いた。その年のウィンブルドンのテニスで優勝した、アメリカのムーディ夫人も同じ船だった。船の中で一番印象的だったのは、ベルリン・オリンピックのフィルムを見せてくれたことである。例の美の祭典であるが、その最後はマラソンで日本（といっても韓国）が優勝して、君が代で幕となることであった。

ニューヨーク到着以後は、特にここに書く必要のあるものはない。日本に帰り着くまでの間の旅行であり、見物であり、遊びであっただけである。日程だけを書けば7月30日ニューヨーク発汽車で大陸横断、8月5日秩父丸でサンフランシスコ発、同20日横浜入港であった。

ここでひと言つけ加えたいことは、秩父丸に乗ってから、最近日本で出来た歌だと言って、毎日のように聞かされたのが、「見よ東海の空明けて……」であった。この時は聞延びのした変な歌だと思ったが、帰国後は忽ちのうちに日本中を風靡してしまって、遂に戦争へと突入してしまったことである。

昭和12年10月14日神戸を出帆して以来、約10カ月の、しかも地球を南北と東西に回る、波乱に富んだ大旅行であったが、やっとここに終止符を打つことが出来た。私の留守中に家内は静岡から上京して、借家を借りていてくれた。これが現在の田園調布の自宅である。その時からもう40年以上の歳月が流れた。

## 第二 鯨 学

このようにして第二鯨学を開始する準備は完了した。資料も整ったし、しばらくはこれらの資料を読むことが仕事だった。日本に帰った年の南氷洋、つまり1938—39年漁期は休んだが、その次の1939—40年漁期と1940—41年漁期は南氷洋に行った。これで戦前の操業は終り、1941年（昭和16年）12月に戦争に突入してしまったのであった。南氷洋に行ったこの2漁期に、私自身もいろいろな調査を実施したが、他の監督官にも頼んで、調査をして貰った。例えば当時水産試験場（現在の東海区水産研究所）におられた花岡資さんにも頼んだように思う。花岡さんは1939—40年漁期、監督官として極洋丸に乗船した。この漁期私は第三図南丸に乗船した。

どのような事情があって、現在鯨研図書室に収まっているのかかわからないが、この花岡さんの「南氷洋捕鯨見聞調査記」なる報告が、鯨研の図書室にある。水産試験場の用紙にペン書で書いたもので、写真、図、

表が豊富に収録されている、部厚い報告である。この報告は8章に分かれており、各章はさらに節に分かれているが、第5章、第6節は黄体数及び成熟率で、この中にシロナガスとナガスについて、黄体数の出現頻度が体長（尺）別に図示されている。

1940—41年漁期は私は極洋丸に乗ったが、その帰りの航海中に「鯨類」の原稿を書き上げた。これは田内森三郎先生と大谷武雄先生が編集責任者となり、水産製造工学講座として叢書を厚生閣から出すこととなり、お前が鯨類を担当せよと命ぜられたからである。鯨といっても製造原料ではなく、生物学的なものでよいということだったので、お引き受けしたのである。内容はディスカバリーその他の資料から知り得た知識を纏めたものであったが、枚数が限られていたため、136ページの小冊子である。

このように戦前において、既に第二鯨学が開始されたのであるが、この時代はまだ、いわば個人の趣味であり、機構としてどうということではなかった。

戦後第1回の南氷洋出漁の時、私は監督官として第一日新丸に乗船した。GHQからはテリーさんが乗船し、外に英國のブリュースターさんも、船がロンボック海峡を通る時に、小舟でやって来て、本船に乗り移った。

操業を開始する直前になって、GHQから長文の電報が届いた。それは捕獲した鯨1頭毎に次の調査をせよとして、その項目が列挙してあった。それはディスカバリーの調査項目であって、戦前からわれわれが既に手がけて来たものである。僚船の橋立丸には崎浦さんが乗っていた。彼もよく承知しているし、私の書いた「鯨類」にも書いてあるし、それを持って乗船した筈である。

テリーさんが心配して、そんなことが出来るかと尋ねたが、戦前からやっていたに於いて、調査のことは任せてくれと、見得を切った。

このようにして第二鯨学は農林省の監督官によって始められ、その人たちの努力によって多くの資料が得られ、それが基となって、とる鯨の制限体長も、北半球は南半球と別になったし、さらに北太平洋におけるニタリクジラの発見へと発展した。

その第二鯨学も次いで鯨研に移り、それが遠洋水産研究所に移行して、今日に至っている。

最後に、この第二鯨学に関連して忘れてならないのが故松浦義雄君である。松浦君は昭和8年に東大理学部の動物を卒業して、直ちに農林省に入った。最初はサケ、マスの仕事をしていましたが、鯨の係が出来ると同

時に、ここに移った。日新丸は1936—37年漁期初めて南氷洋に出漁したが、この時松浦君は監督官として乗船した。この点からすれば、私より彼の方が1年先輩である。しかも序に英国やノルウェーに赴いて、現地の事情や調査の方法なども調べている。

既に述べたように、私が初めて南氷洋に行った時は、時間的予猶がなく、彼と充分な打合せは出来なかった。例えばディスカバリー・レポートは私はマッキントッシュ博士に頼んで送って貰ったが、彼は英国で買って来たのである。但しまだ現物は届いていなかった。このようにして2部あったのであるが、1部は戦争中空襲で焼けてしまった。

彼は短期間の間に多くの論文を書いた。それらは動物学雑誌や日本水産学会誌に発表されている。その関係で短いものが多いが、突は内容のしっかりした、膨大な論文も書いたのである。不幸にして、この論文は日の目をみなかった。

彼はこの論文を、学位請求論文として、京大理学部の駒井卓教授の処へ提出した。だが不幸にしてこの論文は通らなかった。ただしその理由は、論文そのものはよく出来ているが、その内容が困る。理学部の動物である以上、内容は分類とか解剖とか組織とか、理学部にふさわしいものでなければ困るというのであった。つまり第二鯨学では駄目で、第一鯨学でなければならぬ、ということであった。

これは彼にとって大きなショックであった。間もなく胸を病み、自宅で静養していたが、東京が空襲されるようになって、彼は休職して郷里の徳山に帰った。

## せ た し あ

桜の花も散り、春の学会シーズンも去りました。鯨研も英文報告を出版し終りようやくにして新年度となりました。読者の皆様にも各々気分も新たに新年度を迎えられたことと思います。さて鯨研も少数精鋭? になって久しく、往年から比べればかなり寂しい状態ですが、この欄を借りましてメンバー紹介を簡単に。

大村所長は増々御健康にて日夜御研究に忙しく、現在はニタリクジラの骨学に力を入れておられます。英文報告も鯨研通信もこの人がいなければできないというのが、高橋裕子女史です。昨年には二人目のお子

これがさらに不幸であった。徳山も空襲され、彼の自宅は助かったものの、隣家との境の塀まで焼けた。その無理がたたったのであろう。終戦を待たずに他界してしまった。彼こそ第二鯨学の創設者であり、南氷洋や北洋にも度々出張して資料を集め、かつ1937年と1939年にはヨーロッパに赴き、1939年の主要捕鯨五カ国の会議にも出席している。

戦後第1回の南氷洋出漁の時は、既に述べた通り、私は第一日新丸に乗船した。出港は長崎であったが、帰港は下関であった。戦後の日本を明るくしたのは、リンゴの歌と南氷洋捕鯨の再開だと言われたが、下関は大洋の本拠でもあり、出迎えは盛大であった。

帰港式が済んで宿屋に引き揚げたところ、奥さんがお見えですと知らせてくれた。当時急行はまだ走っておらず、東京と下関の間も鈍行であり、それも超満員で、乗客は窓から出入りした時代である。私の家内など、わざわざ来る筈はない。誰かわからないが、どうぞと言って室に通して貰った。松浦君の奥さんであった。新聞を見て、私の名前が出ていたので、徳山から態々かけつけてくれたのである。奥さんも捕鯨の再開を心から喜んで下さったが、私としては、松浦君が生きてくれたらと、しみじみ想わずにはいられなかった。

附記。前号(第337号)4ページ右側の11行と28行に「三輪崎」とありますが、これは「宇久井」の誤です。訂正して下さい。(大村)

んを御出産され、まさに一人三役をこなした奮闘中です。また昨年度まで経理関係を担当されていた村山房子女史が3月に退職され、後任にこられたのが武井裕子嬢です。3月までは東海区水研の嶋津靖彦さんの研究室に勤務されておりましたが、くどき落して来ていただきました。さて私は南氷洋の国際鯨類調査でソ連調査船に乗船して2月下旬帰国致しましたが、未だ放心状態後期というところです。次号よりソ連船乗船記連載を予定致しておりますので詳しくは文中にて。

(加藤)